

B-3

いわゆるラ抜き言葉の形成における形態統語的制約について*

高橋英也（岩手県立大学），江村健介（岩手県立大学）

1. はじめに

(1) いわゆる「ラ抜き言葉」とは：

上一段、下一段、カ変活用の動詞に可能の意の助動詞「ラレル」が付いたものから「ラ」が脱落した語。
（『広辞苑（第五版）』1998）

(2) a. ラレル形： 「見られる」「食べられる」「助けられる」「来られる」

b. ラ抜き言葉： 「見れる」「食べれる」「助けれる」「来れる」

(3) a. 雨が降るのは確実と見られる （自発）

b. 午後に校長先生が教室に来られる （尊敬）

c. 遭難者が次々に助けられた （受身）

d. 太郎は5個もリンゴを食べられる （可能）

(4) ラレル形と異なり、ラ抜き言葉は「可能」の意味のみを表す。

(5) ラ抜き言葉の発生とその要因（cf. 神田 1964, 青木 1996, 2010, 真田 2006）

a. 可能の助動詞「ラレル」の「ラ」が省略されて成立した。

b. 五段活用とサ変の未然形「サ」に付ける「レル」が、一段動詞・カ変動詞に付くようになった。

c. 四段他動詞から生成される可能動詞への類推により、一段動詞・カ変動詞の可能動詞化が成立した。¹

(6) ラ抜き言葉は大正～昭和初期にかけて方言（北海道、東海地方、中部地方、中国・四国地方など）で始まり、100年近くをかけて徐々に全国に広がった。²（渋谷 1993, 鈴木 1994, 井上 1998 など）

(7) 分散形態論における動詞の形成：

範疇的に中立な語根√Root に対して特定の動詞機能範疇として具現する接辞が後接することで動詞句が重層的に拡張され、語としての動詞が形成される。（Marantz 1997, 2001 など）

(8) ラ抜き言葉：一段動詞とカ変動詞に接辞 *e* を後接させ、可能動詞化したもの。（高橋・江村 2015）

（e.g. 曲げる/mag-e-ru/ → 曲げれる/mag-e-re-ru/）^{3 4}

*本研究は、科研費（基盤研究（C）26370453 および 26370463）の助成を受けている。

¹ ここで述べる四段他動詞とは、厳密には「読む、飲む」のような対応する自動詞を持たない四段他動詞のことを指す。青木（1996, 2010）は、江戸期の資料に関する通時的な調査を通して、あらゆる四段動詞の可能動詞化が、江戸後期にできるようになったと考えられる、と述べている。本発表では「ラ抜き」の発生要因について、(5c) の立場を採用し、議論を進める。

² 井上（1998）は、アンケート調査を通して、1910 年前後生まれの人のラ抜きの使用分布が方言的な傾向が顕著である一方、1950 年前後生まれの人のラ抜きの使用分布は急速に広がり、大部分の都道府県で（可能動詞を用いる文脈で）50%以上の使用率になっていること、さらに1980年代生まれの人のラ抜きの使用率は、全国的に一層高まっていることを指摘している。当初、ラ抜き言葉が方言的であった背景には、特定の地域では「可能」の意味を、「尊敬」などのラレル形が持つその他の意味から区別する必要があった他、世代や性別などの社会的要因があったと推察されるが、本発表ではこの問題に関してはこれ以上立ち入らないことにする。

³ /r/ の生起については、ここでは母音連鎖を避ける挿入子音として扱うに留めて、今後の検討課題としたい。

⁴ 本発表では子音語根を認める立場で議論を進める。

(9) 研究対象としてのラ抜き言葉：

規範的な観点からは誤用とされてきたが、今やほぼ全国的に用いられるようになっている状況に鑑みると、「ラ抜き」を容認する話者にどのような文法的メカニズムが備わっているかを明らかにすることは、理論言語学的な観点から重要な作業と言える。(cf. 金水 2003, 高橋・江村 2015)

(10) 本発表：

- a. ラ抜き言葉の容認性に関して実施した質問紙調査の結果に基づき、「ラ抜き言葉の形成可能性が、自他交替における形態的示唆性と相関する」ことを指摘する。
- b. ラ抜き言葉の形成可能性に関して、従来指摘されている音節数の制約が、動詞の形態統語的・意味的性質に由来する、「見せかけの」一般化であることを論じる。

2. 問題の所在：ラ抜き言葉の形成可能性と音節数

(11) 音節数の制約(渡辺 1969, 山本 1985, 井上 1998, 金水 2003 など)

3 音節以内の動詞は、4 音節以上の動詞に比べてラ抜き言葉の形成が容易である。^{5 6}

(見る/見れる, 建てる/建てれる, 調べる/?*調べれる, 考える/?*考えれる)

(12) 音節数に課せられる制約の有効性が広く認められている一方、形態統語論の観点から「ラ抜き」を生成するメカニズムを考察している研究は皆無に等しい。

(13) 本発表: 音節数以外の形態的条件、特に、自他交替にかかる形態論が、ラ抜き言葉の容認性に影響するか否かを、質問紙調査を通して明らかにする。⁷

3. 理論的前提と可能動詞の派生

(14) 可能動詞に対する伝統的な統語分析

- a. (*ŋ*)*are*/(*ŋ*)*e*による複文構造(井上 1976, Koizumi 1995, Ura 1996 など)
- b. [_{VP} 太郎 [_{VP} ロシア語 *yom*] *are*/ *e*]

- (15) a. 太郎がロシア語を 読まれる/読める b. 太郎がロシア語が 読まれる/読める
- c. 太郎にロシア語が 読まれる/読める d. *太郎にロシア語を 読まれる/読める

(16) 分散形態論 (Distributed Morphology) の基本的想定 (Marantz 1997, 2001 など)

- a. Root Hypothesis : 語はもともと範疇未指定で、範疇未指定の語根√Root と *v* などの機能範疇主要部が統語的に併合することで決定される。
- b. Single Engine Hypothesis : 語形成を含む全ての構造は統語論で形成される。

⁵ 本発表では、動詞の音節数に語尾の「ル」を含めることにする。

⁶ 中部地方や中国・四国地方などのラ抜き言葉が先駆的な地方では、東京などのラ抜き言葉が徐々に広まっている地域と異なり、音節数の制約が適用されないとの指摘がなされている(井上 1998 など)。なお、書き言葉には、「ラ抜き」に対する抑制がより強く働くと考えられるため、本発表では「話し言葉としてのラ抜き言葉」に焦点を当てて議論を進める。

⁷ また質問紙調査において刺激として使用した動詞は、下一段動詞で統一した。

c. Late Lexical Insertion : 語彙挿入は Spell-Out 後に (PF で) 起こる。

(17) $[_{GetP} \text{Experiencer}_i [_{vP} \text{ec}_i [_{vP} \sqrt{\text{Root } v}] v] \text{Get}]$ ^{8 9}

(18) a. 内項と外項は、動詞化子である 'little' v と 'small' v にそれぞれ導入・認可される。

(cf. Kratzer 1996, Borer 2005)

b. Get : 動詞 $\sqrt{u'get'}$ の文法化された語根で、主題役 Experiencer を付与する。

(cf. Nakajima 2011, 2014, 中畠 2015)

c. 可能動詞を形成する接辞 e は、'small' v の上位を占める機能範疇 Get として生起する。 ^{10 11}

(高橋・江村 2015)

(19) a. 太郎が来月アメリカに行ける $a'. [_{GetP} \text{太郎}_i [_{vP} \text{ec}_i [_{vP} \text{アメリカに } \sqrt{\text{ik } v}] v] e]$

b. 太郎がロシア語を読める $b'. [_{GetP} \text{太郎}_i [_{vP} \text{ec}_i [_{vP} \text{ロシア語 } \sqrt{\text{yom } v}] v] e]$

(20) 自他交替に関わる形態素は 'small' v に具現する。(cf. Pylkkänen 2002, 2008)

(21) a. あのマジシャンはスプーンを曲げれる $a'. [_{GetP} \text{マジシャン}_i [_{vP} \text{ec}_i [_{vP} \text{スプーン } \sqrt{\text{mag } v}] e] e]$

b. 弟は器用に舌を丸めれる $b'. [_{GetP} \text{弟}_i [_{vP} \text{ec}_i [_{vP} \text{舌 } \sqrt{\text{marum } v}] e] e]$

(22) a. 会長は毎月あの雑誌にコラムを載せれる $a'. [_{GetP} \text{会長}_i [_{vP} \text{ec}_i [_{vP} \text{コラム } \sqrt{\text{nos } v}] e] e]$

b. あの船長は数分で敵の艦隊を沈めれる $b'. [_{GetP} \text{船長}_i [_{vP} \text{ec}_i [_{vP} \text{艦隊 } \sqrt{\text{sizum } v}] e] e]$

4. 質問紙調査

(23) 調査目的 : 刺激となる各群の動詞を、音節数の観点で均等にした場合に、自他交替にかかる形態論が、ラ抜き言葉の容認性に影響するか否かを明らかにする。

(24) 被験者 : 岩手県在住の日本語母語話者の大学生 43 名で、性別の内訳は男性 17 名、女性 26 名であった。平均年齢は 20 歳 6 ヶ月 (標準偏差 7 ヶ月) であった。 ¹²

(25) 刺激 : 3 音節動詞群 I (e.g. 上がる/上げる)、4 音節動詞群 II (e.g. 丸まる/丸める)、3 音節動詞群 III (e.g. 建つ/建てる)、4 音節動詞群 IV (e.g. 歪む/歪める) の 4 つのタイプについて、各 20 項目、計 80 項目を刺激として使用した。

⁸ 可能動詞化には agent defocussing が関わるという洞察の下で、ここでは、'small' v 指定部に生起する (可能動詞化の入力となる動詞がとる) 外項は、統語構造上は何らかの空範疇 (ec: PRO もしくは移動されたコピー) として存在するのみであると仮定する。

⁹ 高橋・江村 (2015) は、「寝られる、食べられる」のようないわゆるレ足す言葉の容認性に関する方言間の差異を捉えるために、(17) の構造を仮定した上で、レ足す言葉が容認される中部地方などの方言では、可能接辞 e が随意的に Get から 'small' v に「再分析」される、という提案を行っている。本発表では、いわゆるラ抜き言葉のみを議論の対象にする。

¹⁰ 日本語における「三層目の」動詞機能範疇については、藤田・松本 (2005), Aoyagi (2010), Fukuda (2012) などで提案が見られる。

¹¹ Get の生起は、「獲得・到達・完遂」といった意味的概念と結びつくとして仮定する。

¹² 井上 (1998) によれば、岩手県を含む東北地方は、中部地方のようなラ抜き言葉の先駆的な地域ではなく、100 年近くをかけて徐々にそれが広まった地域の一つである。従って、東北地方 (主として岩手県) 出身者を被験者として、ラ抜き言葉の容認性に関する質問紙調査を実施することは、音節数の制約の有効性を実証的に検討する点においても重要と言える。

(26) 動詞群 I・II は、自他交替が接辞 *ar/e* によって具現するのに対し、動詞群 III・IV は、他動詞形においてのみ接辞 *e* が顕在化する。

(27) 動詞群 I: a. あのマジシャンはスプーンを曲げれる b. あの水泳選手は長時間息を止めれる

(28) 動詞群 II: a. 弟は器用に舌を丸めれる b. 首相は選挙の日程を早めれる

(29) 動詞群 III: a. プロ野球選手は都心に豪邸を建てれる b. 会長は毎月あの雑誌にコラムを載せれる

(30) 動詞群 IV: a. あの役者は自然に表情を歪めれる b. あの船長は数分で敵の艦隊を沈めれる

(31) 容認性の尺度:

5 = 日本語として完全に容認できる

4 = 日本語としてどちらかというと容認できる

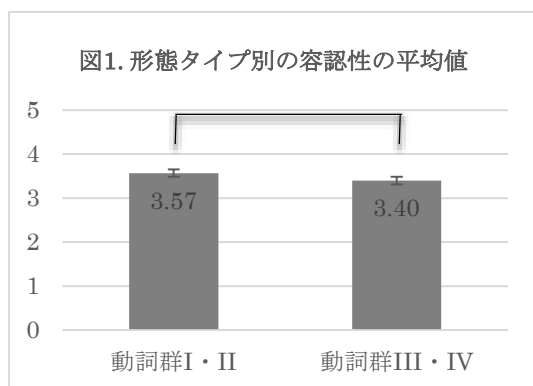
3 = どちらともいえない

2 = 日本語としてどちらかというと容認できない

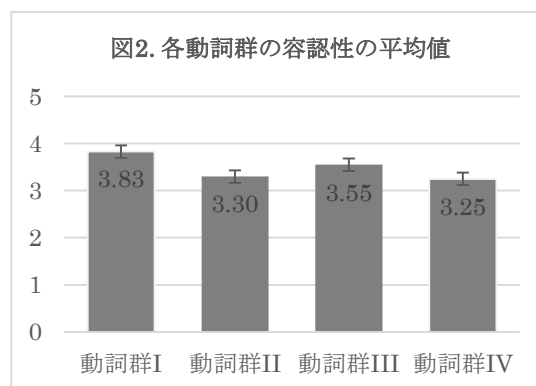
1 = 日本語として全く容認できない

(32) 予測: (i) 自他交替が接辞 *ar/e* によって具現するタイプ (= 動詞群 I・動詞群 II) と、他動詞形においてのみ接辞 *e* が顕在化するタイプ (= 動詞群 III・IV) の間に、有意差は観察されない。

(ii) 動詞群 I と動詞群 II、動詞群 III と IV の間に、それぞれ有意差は観察されない。



** $p < .001$



** $p < .001$

(33) a. 被験者内 1 要因 (= ラ抜き言葉の容認性) 4 水準 (= 動詞のタイプ) の分散分析を行った結果、動詞のタイプに有意な主効果が見られた。[$F(3, 42) = 25.75, p < .001$]

b. 異なる形態的示唆生を持つ動詞群 I・動詞群 II と動詞群 III と IV を対象に、対応のある t 検定を行ったところ、前者の容認性の方が後者よりも有意に高かった。[$t(85) = 21.29, p < .001$]

c. 同じ形態的示唆生を持つ動詞群 I と動詞群 II、動詞群 III と IV を対象にそれぞれ対応のある t 検定を行ったところ、前者の比較においては動詞群 I の容認性が [$t(42) = 34.84, p < .001$]、後者の比較においては動詞群 III の容認性が有意に高かった。[$t(42) = 16.22, p < .001$]

5. 考察

- (34) 結果 : (i) 自他交替が接辞 *ar/ e* によって具現するタイプは、他動詞形においてのみ接辞 *e* が顕在化するタイプよりも容認性が高い。
- (35) 井上 (1976) : 可能動詞化の形態素は、有生主語の意志によって制御できる非状態動詞を選択する。
- (36) a. *彼女は母親に似れなかった b. *大気汚染で洗濯物が白く乾けない
c. *生け垣がその庭を囲めなかった (cf. 徳川軍がその城を囲めなかった)
- (37) a. 動詞群 I : [GetP マジシャン_i [vP *eg* [vP スプーン $\sqrt{\text{mag}}$ v] *e*] *e*] (マジシャン : Experiencer かつ Agent)
b. 動詞群 II : [GetP 弟_i [vP *eg* [vP 舌 $\sqrt{\text{marum}}$ v] *e*] *e*] (弟 : Experiencer かつ Agent)
- (38) a. 動詞群 III・IV では、他動詞形の方が有標である。(cf. 屋名池 2000, 青木 2010)
b. 動詞群 III・IV おける他動詞化形態素 *e* は、*v* 主要部に加えて Get 主要部に生起する場合がある。
- (39) a. 大工の太郎は自分の手で豪邸を建てた a'. [vP 太郎 [vP 豪邸 $\sqrt{\text{tat}}$ v] *e*] (太郎 : Agent)
b. 太郎は建築事務所に任せて豪邸を建てた b'. [GetP 太郎 [vP 豪邸 $\sqrt{\text{tat}}$ v] *e*] (太郎 : Experiencer)
- (40) a. 太郎は (事故で) 自分の船を沈めた¹³ b. 大地は子供を豪華客船に乗せた
c. 山田先生は新聞にコラムを載せた d. 両親は成人式で娘に振り袖を着せた
- (41) タイプ 1 : a. フォワードの選手がよく動けている b. 君はさっきうまくセリフを言えていたのに
- (42) タイプ 2 : a. そのぞうきんはきれいに縫えている b. この帯は上手に結べている (竹沢 2015: 267)
- (43) a. タイプ 1 の可能動詞+テイルは進行相の解釈を持つが、タイプ 2 では結果相の解釈のみを許す。
b. タイプ 2 の可能形態素は、脱使役の働きをして自動詞を作り出す要素である。 (*ibid.*: 278)
- (44) a. [GetP フォワード_i [vP *eg* [vP $\sqrt{\text{ugok}}$ v] *v*] *e*] b. [GetP ぞうきん_i [vP $\sqrt{\text{nu}}$ v] *v*] *e*]
- (45) a. 妻は黙って夫を立てた b. あのバンドは観客の心に火を点けた
c. あの作家は長い間失敗を続けた d. あの運送会社は我が家に幸せを届けた
- (46) 結果 : (ii) 同じ形態的示唆生を持つ場合、3 音節動詞群の方が 4 音節動詞群よりも容認性が高い。
- (47) 2 音節のム語尾動詞群には動作動詞の占める割合が高いが、3 音節を超える語群になると、精神的・心理的意味を表す語が多く、特に 4 音節になると、全てがこの種の動詞によって占有される。(釘貫 2015: 4)

¹³ (40a-d) の事例は、長谷川 (2011) の意味での非対格非動作主他動詞として分析できるかもしれないが、その可能性の探究については、今後の検討課題としたい。

- (48) a. 2 音節語：埋む (うむ)、始む (そむ)、染む (そむ)、曲む (たむ)、止む (とむ)
 b. 3 音節語：固む (かたむ)、極む (きわむ)、清む (きよむ)、定む (さだむ)、深む (ふかむ)

(49) 動詞語尾「ム/m/」は、主体における精神的・心理的状态を表示する機能を有するという点で、心理動詞化の形態素と同定できる。

- (50) a. [GetP 弟_i [vP e_g [vP 舌 √maru m] e] e] b. [GetP 船長_i [vP e_g [vP 艦隊 √sizu m] e] e]

6. まとめ

- (51) a. ラ抜き言葉の形成可能性は、自他交替における形態的示唆性と相関する。
 b. 自他交替が接辞 *ar/ e* によって具現するタイプが、他動詞形においてのみ接辞 *e* が顕在化するタイプよりも容認性が高い結果は、後者が構造的に多義であり、主語の動作主性を伴わない構造を持ちうることに起因する。
 c. 従来指摘されているラ抜き言葉の形成可能性に関する音節数の制約は、「見せかけの」一般化であり、3 音節動詞群の方が 4 音節動詞群よりも容認性が高い結果は、精神的・心理的意味を表す動詞語尾「ム」の意味的性質に起因する。

主要参考文献

- 青木博史 (2010) 「第一部 可能動詞の派生」『語形成から見た日本語文法史』ひつじ書房。
 長谷川信子 (2011) 『70 年代の生成文法再認識—日本語研究の地平—』開拓社。
 井上史雄 (1998) 「ラ抜きことばの背景」『日本語ウォッチング』岩波新書。
 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語』大修館書店。
 神田寿美子 (1964) 「見れる・出れる—可能表現の動き—」『口語文法講座 3 ゆれている文法』81-91. 明治書院。
 金水敏 (2003) 「ラ抜き言葉の歴史的な研究」『言語』32-4, 56-62. 大修館書店。
 釘貫亨 (2015) 「精神的・心理的意味を表す古代日本語動詞の拡張過程」南山大学言語学講演会 発表ハンドアウト。
 Marantz, Alec. (1997) "No Escape from Syntax: Don't Try a Morphological Analysis in the Privacy of Your Own Lexicon," *UPenn Working Paper in Linguistics* 4: 201-225.
 Nakajima, Takashi. (2014) The Formation of Predicate "Word": A Decompositional Approach. Handout. Keio University Linguistics Colloquium.
 中畠崇 (2015) 「膠着する文法」南山大学言語学講演会 発表ハンドアウト。
 Pylkkänen, Liina. (2008) *Introducing Arguments*. MIT Press.
 高橋英也・江村健介 (2015) 「可能動詞の形態統語論に関する一考察：接辞 *e* の分布の観点から」『日本言語学会第 151 回大会予稿集』236-241. 日本言語学会。
 竹沢幸一 (2015) 「2 種類の「可能動詞+テイル」構文」深田智・西田光一・田村敏広 (編) 『言語研究の視座』266-279. 開拓社。
 屋名池誠 (2000) 「書評 釘貫亨著『古代日本語の形態変化』」『国語学』第 51 巻 1 号. 116-124.